【メルディア】一般財団法人メルディア 広報誌

MELDIA

FREE
VOL.69
SEP.2025

就職への不安を一緒に解消しましょう!
メルディアトータルサポート上野　訓練生レポート
働く未来は「自分を知る」ことから

靴磨きが拓く新たな道
「職人」として働く
チャレンジを後押し

「自分が何者かを知って、
場所を少し動かす」ことで
人生が変わった

このらぶチャンネル
「この子にとってプラスになる」
このはさんと家族が歩む、
21年の記録

1万人の雇用創出へ
自治体とのリサイクル
協定を通じて描く
「環福連携」の未来

楽しいが原動力!

エハラマサヒロが語る、

発達障がいという武器と家族の存在

EHARA FAMILY

楽しいが原動力! EHARA FAMILY

エハラマサヒロが語る、発達障がいという武器と家族の存在

「人と違うことが嬉しくてワクワクする」。そう語る芸人、エハラマサヒロさん。
自身の発達障がい（ADHD・自閉症スペクトラム症）の特性を公表し、それを武器として活躍する彼の生き方は、
多くの人に勇気を与えています。奥様の千鶴さんの声も交えながら、その「楽しい」が詰まった日常に迫ります。

目標があると走れる。「極める」才能と人間関係での苦労

エハラマサヒロさんが芸人としての道を歩み始めたのは、彼の持つ特性と深く関係しています。一つのことに集中し始めると、できるまで四六時中やり続ける「過集中」という特性を持つ彼は、ダンスや歌、マジック、ヒューマンビートボックスといった多様な特技を次々と習得してきました。これは、周囲から「すごい努力」だと見られることも多いですが、彼自身は「はまっているだけ」であり、義務感や頑張りとは無縁だといいます。そして「飽き性なので」というエハラさんは7割できるようになったら次に行く、この特性が、結果的に「多才」と呼ばれるエンターテイナーとしての彼を形作ってきました。

一方で、発達障がいの特性は、常にプラスに働いてきたわけではありません。昔は人の感情が読み取れず、悪気はないのに人間関係で苦労したり、人からじんわりと嫌われたりすることがあったといいます。しかし、芸人の世界は「はみ出す」ことが求められるため、空気を読めないなどの特性が「ガッツがある」「面白い」と評価されることも。診断を受けてからは、自身の特性を理解し、「俺こういうやつやから、迷惑かけるかもしれへん」と事前に伝えることで、人

Masahiro Ehara

CONTENTS VOL.69

MELDIA 2025 SEP.

03 楽しいが原動力! EHARA FAMILY
エハラマサヒロが語る、発達障がいという武器と家族の存在

06 「自分が何者かを知って、場所を少し動かす」ことで人生が変わった

08 靴磨きが拓く新たな道 「職人」として働くチャレンジを後押し

10 メルディアトータルサポート上野　訓練生レポート
就職への不安を一緒に解消しましょう!
働く未来は「自分を知る」ことから

12 1万人の雇用創出へ 自治体とのリサイクル協定を通じて描く「環福連携」の未来

14 誰もが輝ける舞台へ ――新体操クラブ・ルミンフィニRGの挑戦

16 だるまに込める、生きる力
―白根学園・風の丘がつなぐ地域の伝統―

18 このらぶチャンネル
「この子にとってプラスになる」このはさんと家族が歩む、21年の記録

20 漫画家カレー沢薫が描く
『なおりはしないが、ましになる』
～発達障がい診断から紐解く、自分らしい生き方～

22 セサミストリートの絵本がスタート！ VOL.3
みんなステキ! 1、2、3!

24 温もりをくれた姉の存在：家族の絆と障がいへの理解
水越けいこ M Size はじまり Again

26 カウンセリングルーム メルディア ウェルネス

28 おさんぽ DE 楽しむ！
着物を着て、「小江戸」な雰囲気が魅力な川越を楽しもう！

31 プレゼント

はみ出しているからこそ習得できたこともたくさんある

間関係のトラブルを減らすことができるようになったと語ります。

奥さんの柔軟性と子どもたちの存在が自身の力に

エハラ家は、マサヒロさん、千鶴さん、そして5人の子どもたち(美羽ちゃん、風羽ちゃん、音羽ちゃん、羽汰くん、杜羽くん)の大家族です。最近、一軒家に引っ越したばかりで、初めて庭にプールを出して遊んだことが、一軒家ならではの遊びで楽しかったと話します。

子育てにおいて、エハラさんが最も大切にしているのは「子どもと同じ年になって友達になる」という姿勢です。子どもを大人としてではなく、同じ目線で接することで、一緒に遊び、子どものテンションを上げることが彼の担当だと話します。子どもたちが伸び伸びと育つよう、「許容の教育」を掲げ、できること・上手になることを増やせればと語ります。時には叱るという緊張感を持たせつつも、絶好の遊び相手として子どもたちの育児にも全力です。

奥様の千鶴さんは、マサヒロさんの特性については「こういう人だから」と始めから受け入れ、柔軟に対応しているといいます。「私自身にこだわりがあまりなくて、おもしろいことを選びたい性格なので、今までも楽しく過ごせたのかなと思います」と語る千鶴さん。突然「来週引っ越し」と決断したり、一度ハマったゲームには何十万円も課金したりと、彼の突飛な行動に驚くこともあるそうですが、そうした彼の「熱があるうちしか動けない」という特性を理解し、お互いに支え合いながら楽しく暮らしています。

診断がもたらした「楽」な生き方と「得意」の見つけ方

あるとき、自身の幼少期のエピソードを人に話したところ「(発達障がいとして)とても典型的なもの」と言われたことで、自身の特性を自覚したといいます。

診断を受ける前は、人の顔や名前、思い出をほとんど覚えていなかったり、やるべきことができずに悩んだりすることが多かったそうですが、診断を受けてからは「そっかぁ」と気持ちが楽に。公表を決断したのも、「(人と違うということを)よし、ちゃんと言える!」と彼にとってはとても前向きな理由でした。

エハラさんは、発達障がいという特性は芸人という仕事にプラスに作用する部分が多いと感じています。芸人は「はみ出す」ことが求められる世界であり、彼は生まれつき「はみ出し」を持っていたため、それが強みになったのです。そして、「楽しいが原動力になる」という子どもの姿を見て、大人になってから「やらなければいけないこと」に縛られていた自分に気づき、今では好きなことだけを仕事にするように変えていったと語ります。この変化が、彼が日々を楽しく、ストレスなく生きる原動力となっています。

エハラ家の
スピード感と楽しむ源は
「熱があるうちに!」

Masahiro Ehara

Ehara Family

笑顔と笑いが溢れる エハラ家ファミリー!

「枠から超えている」人間の方がこれからの人生強い

「人生満足度が多分人の何十倍もある。それが自分の強み」と語るエハラさん。「自分は発達障がいの特性が重度という診断だったけれど、もし、今の特性が無くて普通の人だったらつまらない人生だったかもしれない」。そして、「こういう人がいるんだ」と、生きづらいと思っている人にも自身の生き方を知ってほしいといいます。「すべてをネガティブに考える必要はないと思います」。彼は、人と違うことは決してマイナスではなく、むしろ「枠から超えている」人間の方がこれからの時代は強いと強調します。自分にとって楽しいことや好きなことと、自分の特性がどういう風にマッチするかを考えてみると、何かいい着地点が見つかるかもしれないといいます。

「何かをやっていく中で、迷惑をかけるつもりはなくても、結果的に迷惑をかけてしまうことはあるかもしれない。その都度『すみません』と謝りながら、できる限りの埋め合わせをすればそれで良いのではないかと今は考えています」。

エハラさんの今後の展望はシンプルです。それは「楽しいだけのために生きる」こと。朝起きてから夜寝るまで、何か楽しいことのために行動し、毎日何かを得る生活をずっと続けていきたいと語ります。そして、その原動力となっているのは、否定することなく彼を応援してくれる家族の存在です。「彼が楽しく笑って過ごしてくれることが一番」と力強い言葉をかける千鶴さん。エハラさんにとって、家族は「一番の親友」であり、かけがえのない宝物だといいます。

子どもたちが教えてくれた
「楽しい」を大切に突き進みます!

3名様 PRESENT

A

エハラマサヒロ、大村亮介著「新米パパも子育てが楽しくなる　笑いある家のつくりかた」(2025)サイン入り本

詳しくはP.31

エハラマサヒロさん

お笑いタレント、ミュージカル俳優、YouTuberなどとして活動中。妻と5人の子どもたちとの7人家族。一つのことに集中すると徹底的に取り組む「過集中」の特性を活かし、ダンス、歌、マジックなど多彩な特技を持つ。仕事もプライベートも「楽しい」を原動力としている。
https://www.instagram.com/eharamasahiro/?hl=ja

エハラ家チャンネル

エハラ一家のYouTubeチャンネル。一軒家に引っ越したばかりの家族が、庭でプール遊びをするなど、大家族ならではの賑やかで楽しい日常を発信している。
https://www.youtube.com/channel/UCf5iV0mjb644gOTV4NAiN2Q

「自分が何者かを知って、場所を少し動かす」ことで人生が変わった

葉っぱ一枚から生み出される繊細で温かいアートが魅力の葉っぱ切り絵アーティストのリトさん。
自身の発達障がい（ADHD）と向き合い、
「得意」を武器として切り開いたその道のりは、多くの人に希望を与えています。
葉っぱ切り絵との出会い、そしてアーティストとして確立するまでの道のりなどを伺いました。

「過集中」を武器に、葉っぱに命を吹き込む

リトさんが葉っぱ切り絵を始めたきっかけは、自身のADHDという特性を活かしたいという思いからでした。幼い頃から一つのことに没頭すると周りが見えなくなる「過集中」という特性を持ち、会社員時代には職場で怒られることも多かったといいます。しかし、「この集中力を何かに使えないか」と考え、アートの道に進む際に「過集中を自分の武器として使う」ことを決意しました。美術の勉強経験はなく、葉っぱ切り絵はまさにゼロからのスタートでした。

葉っぱ切り絵を始めて8ヶ月目、「葉っぱのアクアリウム」というジンベエザメの作品がSNSで大きな反響を呼び、フォロワーが一気に増加。けれど、無職だったリトさんが感じていたのは「これだけでは食べていけない」という不安でした。

その約1ヶ月後に制作した『エルマーのぼうけん』をテーマにした作品が、「葉っぱのアクアリウム」を何倍も上回る反響を得て問い合わせも増えたことで「葉っぱ切り絵を仕事にできるかもしれない」と確信したと振り返ります。

葉っぱの上の心温まるストーリーと日々進化する緻密な技術

SNSに日々寄せられるのは「優しい世界に癒されます」「見ていて気持ちが温かくなります」といったコメント。

多くの人々を魅了する動物たちの心温まるストーリーは、じつはリトさんが人間を描くのが苦手だったことから生まれました。作品のアイデアは、季節のイベントや記念日、テレビで放送されるアニメや映画などから得ることが多いそう。

制作は「1日に1作品が限界」。アイデア出しから下絵、撮影、タイトル付けまで含めると、1日8時間ほどかかることもあるといいます。縦長の葉っぱを活かして首の長いキリンを作るなど、葉っぱの特性を丁寧に見て作品に反映させています。

感嘆するのは、その緻密さです。作品展を訪れるお客さんからは、「1ミリ以下の世界」だと、その細かさに驚きの声が上がります。その技術自体、初期の作品と比べると線の滑らかさやキャラクターの表情が格段に向上していることが見て取れます。

以前は難しかった白抜きの表現も可能になり、より繊細で魅力的な作品を生み出せるようになりました。

葉っぱ切り絵が繋ぐ世界と、人生の転機

リトさんにとって葉っぱ切り絵は「自分といろんな世界を繋いでくれる橋」だといいます。たくさんの人との出会いが生まれたことはもちろん、海外の方から「この作品はどこで見られるのか」というメッセージも。「自身が海外に行くのではなく、海外の方々が僕の作品を見に日本に来てくれることを今は目標にしています」。

会社員時代、9年間仕事がうまくいかなかったというリトさんですが、アートの道に進んでからはわずか1～2年で結果が出るようになりました。これは、才能があったから成功したというよりも、「自分が何者かを知って、場所を少し動かした」ことで人生が変わったからだと語ります。例えば、プロの切り絵作家が数ヶ月かけて大作を完成させるのに対し、リトさんは1日で作れる制作スタイルを取っており、それが性に合っているそう。作品を投稿してすぐにSNSで反響が返ってくることも、頑張り続けられる大きな理由だといいます。

昨年には自身の美術館がオープンしました。「写真だけではなく、実際に葉っぱ切り絵を見ていただける場ができたことは本当に大きいです」と喜びを語ります。

自分を知り、得意を活かすというメッセージ

自分の苦手なことを同じ場所でずっと頑張る努力も大切かもしれないけれど、それ以上に「自分は何が得意なのか」を知ることが重要だと語るリトさん。自分にとって当たり前のことでも、それは誰かにとっての当たり前ではない可能性があるからです。そして、自分がどういう人間で、どういう強みと弱みがあるのかを知ることが大切だといいます。自分の特性を知り、それを活かせる場所を見つけることで、人生は大きく変わるとリトさんは説きます。

リトさんは、葉っぱ一枚から無限の可能性を広げ、世界中の人々と繋がり、今日も作品を通じて温かいメッセージを届け続けています。

リト@葉っぱ切り絵展の様子。子どもから大人、海外の方まで多くの人が訪れます。

SNSに投稿されている印刷版と、原画が並ぶ様子。繊密さに驚きです。

サイン会に応じるリトさん。一人ひとりとフランクに接する姿が印象的でした。

事務局長永野(左)もリトさんの作品へのこだわりに感嘆。

Ⓑサイン入り葉っぱ切り絵ポストカード5枚セット…1名様
Ⓒアクリルキーホルダー&スタンドセット…1名様
Ⓓ『葉っぱ切り絵カレンダー2026 小さな森の春夏秋冬 54の物語』(講談社)…1名様

詳しくはP.31

リト リーフアート ミュージアム福島（LITO LEAF ART MUSEUM FUKUSHIMA）

福島県福島市飯坂町字銀杏1-13　9:30～17:00(最終入館は16:30まで)
https://www.matsuya-inc.com/art_museum
●入場料(リト リーフアート ミュージアムのみ)
一般1,200円・シニア1,000円・高校生800円・中学生以下無料
※最新情報は公式サイトをご覧ください。

リトさん

葉っぱ切り絵アーティスト。ADHDの特性である過集中を活かし、繊細な作品を生み出している。自身の経験から、自分の強みを知り、それを活かせる場所を見つけることの大切さを伝えている。
https://www.instagram.com/lito_leafart/

好評発売中！
『葉っぱ切り絵いきものずかん』(講談社、2024)
https://www.amazon.co.jp/dp/406535918X

右から、創業者・魚見さん、店長・高田さん、サポート役・赤曽部さん、メルディア事務局長永野。

靴磨きが拓く新たな道
「職人」として働くチャレンジを後押し

京都に拠点を置く「革靴をはいた猫」、通称かわねこは、単なる靴磨き店ではありません。
障がいのある職人たちが活躍し、一人ひとりの可能性を広げる場として注目されています。
元引きこもりで精神障がいを抱える店長の高田さん、創業者の魚見さん、
そしてサポート役の赤曽部さんへの取材から、「得意」を見つけることの喜び、
そして障がいのある方が自分らしく輝ける社会を目指す彼らの思いに迫ります。

靴磨きが繋いだ縁と雇用の可能性

「革靴をはいた猫」は、障がいの有無に関わらず、誰もがチャレンジできる場を作ることを理念に掲げています。その活動は、障がいのある職人の成長とキャリアアップという形で成果を上げています。かつて、ここで働いていた知的障がいのある職人は、その真摯な仕事ぶりを評価され、障がい者雇用をスタートしたいという大企業へ転職するという快挙を成し遂げました。このように、同社は障がい者の雇用の可能性を広げる事業も展開しています。

この店の設立は、魚見さんが大学時代に遡ります。大学キャンパス内にあるカフェで障がいのある方と一緒に働いた経験から、彼らがキャリアを切り拓いていける場を作りたいという思いが芽生えました。大学のカリキュラムとして「みんながチャレンジしていく学校を作ろう」というアイデアから、カフェ、農業、そして職人コースとして「靴磨き」が選ばれました。こうして「革靴をはいた猫」の活動がスタートしたのです。

「また磨いて欲しくて来ました」お客さまからの嬉しい一言

店長を務める高田さんは、友人の紹介をきっかけに靴磨き職人として働くことになりました。当時は、就職活動がうまくいかず不眠症となり、心療内科に通っていた時期でその延長線上でうつ病と診断されました。

「社会と馴染めない」と感じ、自分の考えと会社の仕組みが合わないことに苦しんできた高田さんにとって、靴磨きは大きな転機となりました。靴磨きの仕事は、靴の状態やお客様のニーズに合わせて正解が毎回変わるため、常にやりがいを感じると語ります。

ある日、初めて担当したお客様が、雨の中わざわざ再来店して「また磨いて欲しくて来ました」と伝えてくれたことが、特に印象的なエピソードだといいます。この経験は「今まで困難も多かったけれど、頑張ってきてよかったと思える瞬間でした」と、高田さんに大きな自信をもたらしました。

店長としてお店に立つことには「看板になれることは単純に誇らしいとともに胸を張って働けるようにと思います」と語ります。自分と同世代の人が少ない職人の世界でこういう仕事をしていると言えることが、自身の中での最も嬉しい変化だそう。

300足の靴と向き合い、磨き上げた技術と心

靴磨きの工程は、汚れを落とす作業から始まり、水分の多いクリームから徐々に水分の少ないワックスを使い、磨いていきます。つま先などを光らせる「鏡面磨き」では、ウイスキーに含まれるアルコール成分を利用してワックスを均一に伸ばし素早く乾かすという技法も見せていただきました。高田さんは、靴磨きを始めた当初、3時間磨いても靴が光らなかったそうですが、今ではプロとしてお客様の靴のニーズに応えています。

高田さんの入社当初の印象について、魚見さんは「だいぶ休んでいたんだろうな」と感じたといいます。朝起きられないことから始まり、見守る姿勢でサポートを続けました。高田さんは、都度変わる状況に合わせて「自分を上手に出していく」ことを意識し、我慢しすぎず、かといってストレートに言いすぎないバランス感覚を少しずつ身につけていきました。赤曽部さんは、高田さんの成長を間近で見てきました。当初は朝の出社や言葉遣いなど、社会人としての基礎から教える必要があったといいます。しかし、接客など元々持っていた光る部分はさらに伸び、鏡面磨きの技術を習得するため、300足以上の靴を磨くなど、その真面目な仕事ぶりを高く評価しています。

誰もが「得意」を見つけられる社会を目指して

革靴の魅力や物を手入れすることの大切さをお客様に伝えることを目指し、「ここに来たら心が整う」場所になることを願っている魚見さん。長く使える革靴ならではの中古靴の販売に力を入れたり、東京など各地で活躍する障がいのある職人を増やしていく取り組みに力を入れるなど活動の場を広げています。

高田さんは、「不安なのは自分だけじゃない」ということに気づいてほしいと話します。「苦しい、つらいなどの気持ちを我慢しなくてもいいのではないかと思います」。魚見さんも「やりたいことを自分で見つけるのって結構難しいですよね。私自身が出会いの中で、革靴という選択肢に出会ったように、自分だけの力で変わろうとするのではなく、誰かに変えてもらうぐらいの気持ちで、人に会う中できっかけを掴んでいってほしい」とメッセージを送ります。この会社は、靴磨きを通じて人と人が出会い、誰もが「得意」を見つけ、自分らしく輝ける社会を創造する、そんな未来を目指しています。

株式会社革靴をはいた猫

靴磨き・靴修理など、障がいのある方やメンタルに不安のある方が職人として活躍。その他にも、企業向けに、障がいのある方を雇用する靴磨き事業の立ち上げのサポートや、不登校、引きこもりの若者のチャレンジを後押しする支援プログラムを展開。

御池本店
〒604-0941 京都市中京区 御池御幸町西入ル 亀屋町370-1
サンルミ御池1F　営業時間11:00～19:00(木曜定休)
https://kawaneko39.com/
■リペアされた中古靴が買える！オンラインショップ
https://mercari-shops.com/shops/PgaTwXszA69fEF4cUDzASo

メルディアトータルサポート上野　訓練生レポート

就職への不安を一緒に解消しましょう!

働く未来は「自分を知る」ことから

「働く」ことに不安を抱える人々の、希望の光となる就労移行支援事業所「メルディアトータルサポート上野」。
一人ひとりの特性やスキルに合わせた訓練を通じて、自己理解を深め、自分らしい働き方を見つけるサポートをしています。
今回は、現在訓練中の根本理奈さん、そしてすでに就職を果たした山﨑正さん、慶田陽己さんの3名にインタビュー。
メルディアでの経験が、彼らの働く未来をどう変えたのか、そのリアルな声に迫ります。

「成長」がやりがいにつながる

訓練生　根本理奈さん
2025年4月より通所

2025年4月から訓練を開始した根本さんは、訓練前に職業能力評価を受けました。最初こそ緊張したものの、指導者の丁寧な対応で安心して臨むことができたといいます。職業能力評価結果では、重さや計算といった数字系の作業は苦手だったものの、物のピッキングやパソコン作業は得意だと分かりました。

現在、根本さんは話す際に考える時間が長いことや、質問がうまくできない点、指示確認の方法などを改善するために訓練を続けています。しかし、訓練の中では成長を感じる瞬間も多く、「特にタイムを測る訓練で記録が早くなったときや、パソコン作業でミスが減ったときが嬉しくモチベーションにもつながります」と語ります。現在の訓練は徐々に難易度を上げ始めたところで、ピッキングや色別分類、パソコンでの実力テストなどに取り組んでいます。

実習をそばで見守る職員は、根本さんの「真面目で、アドバイスしたことを少しずつ取り組む姿勢」を高く評価し、今後の就職活動開始に向けてサポートしています。

「自己理解」が自信に繋がる

卒業生　山﨑正さん
就職先　株式会社ノダ

2025年5月に現在の会社に就職し、住宅の新築やリフォームの際に使用する設備や扉などをまとめた資材資料を作っている山﨑さん。身体障がいとADHDの特性を抱えながら、過去に転職を繰り返していました。働くことに悩み、ハローワークで紹介されたのがメルディアでした。

11ヶ月の訓練で山﨑さんが最も得たものは、「自己理解」です。以前はうまくいかないことを病気のせいにしたり、他責にしていましたが、メルディアでの訓練を通じて、自分が何ができて何ができないのかを知り、どう対応すれば良いのかを考えるようになったといいます。

就職後、山﨑さんは仕事の困りごとや体調面について就労支援の担当者に相談し、フィードバックを会社に伝えてもらうことで、働きやすい環境を整えてもらっています。メルディアに通う前と比べて、「自分を否定しなくなり、休日を楽しめるようになりました」と、生き生きとした表情がそのことを物語っています。

卒業生　慶田陽己さん
就職先　明治安田ビジネスプラス株式会社

「働くことの責任」を実感

慶田さんは現在申込書のスキャニングなどデータ入力をする仕事をしています。在学中から就職への不安を感じ、事前に体験期間を経てメルディアでの訓練をスタートしました。ビジネスマナーやPCスキル、コミュニケーション能力など、訓練で身につけたスキルが今の仕事に役立っていると実感しています。働き始めてからは、給料をもらうことで「責任の重さが違う」と感じるようになったと話す慶田さん。勤務時間中に集中して業務に臨んでいます。

人事を担当する川田さんは、彼の「柔らかい雰囲気」と、多様な障がいを持つ同僚と尊重し合えるのではないかという点が決め手だったと話します。また、「体験会で接した際にアドバイスしたことを翌日には実践しようとするところがとてもいいなと思いました」と真面目な姿勢を高く評価しており、入社後もその改善しようとする姿勢は変わらないといいます。

慶田さん自身も、「一人ひとりの多様性を尊重する『人に一番やさしい会社』」を目指す明治安田ビジネスプラスで、やりがいを持って働けていると語ります。

(左)明治安田ビジネスプラス株式会社　川田さん

上野御徒町駅・仲御徒町駅A7出口直結なので
通所に不安がある方も通いやすい立地です。

メルディア トータルサポート
MELDIA Total Support

〒110-0005　東京都台東区上野6-2-14
喜久屋ビル3階
TEL：03-6284-4180
MAIL：mts-u@mlda.jp
お問い合わせ

MELDIA TOTAL SUPPORT UENO

カードピッキング訓練の様子

郵便仕分けで効率的なやり方をトレーニング

大量のビーズの中から色別に分類する訓練

プラグ・タップ組立ての訓練の様子

支援員が一人ひとりに寄り添いながらサポートします

1万人の雇用創出へ 自治体とのリサイクル 協定を通じて描く「環福連携」の未来

リネットジャパンリサイクル株式会社
全国で唯一のインターネット&宅配回収の小型家電リサイクル法の認定業者。ここでは約30名の障がいのある従業員がパソコン等の解体を行っています。

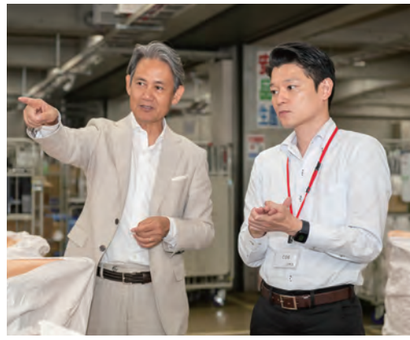
リネットジャパングループは、中古品リユース事業から始まり、今や「1万人の障がい者雇用」という壮大な目標を掲げています。同社が「フレンド社員」と呼ぶ障がいのある従業員は、パソコンなど電子機器の解体という専門的な作業で活躍し、資源再生という社会貢献の一翼を担っています。今回は、黒田社長に、障がい者雇用の始まりから、現在の事業、そして目指す未来について伺いました。

リユースからリサイクルへ、障がい者雇用への挑戦

リネットジャパングループは2000年に創業、リユース事業からスタートし、今年で25周年を迎えました。事業が拡大する中で、パソコンや携帯電話に含まれる希少な資源「レアメタル」に着目。これらを回収する「都市鉱山」を活用するリサイクル事業を始めました。このリサイクル事業が、障がい者雇用への扉を開くことになります。

黒田社長は、「パソコンの分解工程が知的障がいのある方のお仕事に非常に向いている」ことを発見しました。経営理念として「収益と社会性の両立」を掲げていた同社は、これを機に障がい者雇用に積極的に取り組み始め、現在では約30名のフレンド社員が活躍しています。

フレンド社員とは、リネットジャパングループが障がいのある社員を「同じ社員として、仲間として」という意味を込めて呼んでいる名称です。同社は、フレンド社員が働きやすいよう、作業台の工夫など、個々の特性に応じた環境を整備しています。例えば、横一列での作業方式について、トヨタ生産方式を指導されているシニア社員からの助言を受け、一人で完結できる「セル生産方式」に変更。重いものを持ち上げる動作を極力減らすなど、作業者の負担を軽減する工夫を凝らしています。



(左)代表取締役社長・グループCEOの黒田武志さんと
(右)メルディア事務局長 永野周平

フレンド社員一人ひとりに合わせた目標設定も行っています。早い方であればパソコン一台の解体を6～7分で完了させますが、個々の特性や年数によって目標は異なります。定期的な面談で作業の強度を確認し、無理なく働ける環境を整えています。また、一般就労の社員も、障がい者雇用に「誇り」を持てる文化を定着させています。

高い工賃と「環福連携」が拓く未来

リネットジャパングループのもう一つの大きな取り組みは、障がい者の「工賃」向上です。特にソーシャルケア事業の一つとして運営する就労継続支援B型事業所では、プラモデルの組み立てなど特性に合わせた仕事を提供することで、月平均5～6万円という、全国平均を大きく上回る工賃を実現しています。これは日本でもトップレベルの工賃であり、障がい者の経済的な自立に大きく貢献しています。

さらに同社はリサイクル事業(環境)を通じて障がい者雇用(福祉)を広げる「環福連携モデル」を推進しています。「環福連携」とは、自治体や企業が排出するパソコンを、障がい者の方々がリサイクル作業を行うことで、障がい者雇用を創出する取り組みです。黒田社長は、「このノウハウを外部にも提供していきたい」と語り、自社だけでなく、他の企業にも障がい者雇用を広げることを目指しています。

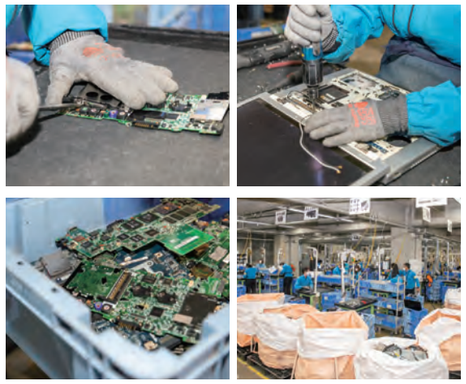
実際にこのモデルは、埼玉県戸田市とJR東日本との協定で具体化しました。同市のパソコンを、JR東日本の特例子会社が処理するというこの取り組みは、全国でも注目されています。また、まさに現在全国の小中学校に導入されたパソコンの入れ替え時期が迫っており、この大量のパソコンリサイクルを、障がい者雇用の創出に繋げるという壮大な計画が進行しています。

1万人の雇用を目指して

黒田社長は「1万人の障がい者雇用」という構想を掲げています。現在は、比較的障がいの程度が軽い方が中心ですが、今後は作業工程を分業化し、より多くの障がい者が働ける環境を整備していく計画です。この「分業化」によって、パソコンの分解作業だけでなく、様々な仕事のメニューを広げ、障がい者雇用の拡大を目指します。

また、同社の事業はリユース、リサイクル、ソーシャルケア、海外HRの4つの領域で展開していますが、今後は「ソーシャルケア事業を真ん中に置いて」、すべての事業を再構築する「全社全事業ソーシャル化」戦略を進めています。障がい者支援を事業の中核に据えることで、社会貢献と事業成長を両立させていく方針です。

現在、同社は全国730の自治体とリサイクル協定を結んでいますが、これを「環福連携モデル」にアップグレードし、地域に根差した障がい者雇用を広げていきたいと今後の熱い想いを語ってくれました。



フレンド社員の方にお仕事について伺いました!

鈴木彩子さん
2021年4月入社。
障がい種別:知的障がい　部署:手解体
「小型家電の解体作業を担当しています。最初は解体スピードが遅かったですが、わからないことは先輩や社員に声をかけて教えてもらい、だんだん早くできるようになりました。周りの社員さんは丁寧な言葉で接してくれて、休憩時間には同僚との会話も楽しんでいます」。

相宮勇斗さん
2019年12月入社。
障がい種別:知的障がい　部署:手解体
「普段はパソコンなどの解体作業をしています。同じ作業を繰り返す中で、作業のやり方やコツをつかめることが楽しいです。最初は難しかったですが、周りの社員の方が優しく教えてくれるので、だんだんスピードも上がってきました。周りとコミュニケーションも取れるようになりました」。

リネットジャパン グループ株式会社
2000年創業。リユースからリサイクル、ソーシャルケア、HRの4つの事業を展開。社会性と収益の両立を掲げ、1万人の障がい者雇用創出を目指している。
https://corp.renet.jp/

5名様 PRESENT
黒田武志著
「私たちは地域の社会課題をビジネスで解決したい700の自治体と創る『環福連携モデル』」
(アスコム、2025)

詳しくはP.31

RENET JAPAN

Luminfini RG
誰もが輝ける舞台へ
――新体操クラブ・ルミンフィニRGの挑戦

年齢も特性も異なる子どもたちが新体操を通じて共に汗を流す、ユニークなクラブチーム――。東京都三鷹市で活動する「ルミンフィニRG」は、共に踊り、共に育つインクルーシブなクラブとして注目を集めています。クラブの代表井上さんと保護者の方々に話を伺いました。

違いを認め合いながら共に舞う、インクルーシブな場へ

東京都三鷹市を拠点とする「Luminfini RG（ルミンフィニRG）」を主宰するのは、元全日本代表で指導歴も豊富な井上寛子さん。障がいのある息子さんの子育てをきっかけに、「誰もがのびのびと表現できる場所を作りたい」との思いから、25年前から障がい児者を対象としたスポーツクラブ設立や指導に携わり、2020年に指導者の竹下さんとともにルミンフィニRGを設立しました。

井上さんは「〝だめ〟と言わない指導を徹底しています。子どもたちが自分から始めたことをまず肯定する。そこから新しい可能性が広がるんです」と語ります。子どもたちの個性や「マイブーム」を尊重し、対話を広げ、活動を深めることを大切にしています。

取材では知的障がいのある子どもたちを対象としたスペシャルクラスのレッスンにお邪魔し、発表会に向けた練習を見させてもらいました。少人数で始まったクラブは、現在、ジェネラルクラスとスペシャルクラスを合わせて20名以上が在籍するチームとなりました。

「挑戦する姿に感動」――保護者たちが語るリアルな声

林さんは中学3年生の娘さんが4～5年間クラブに通っているといいます。きっかけは友人からの紹介。入会時の印象について、「体を動かしながら道具を使うという二つのことを同時にできることが良いと思いました。また、衣装がかわいいというのも本人が気に入った理由の一つです」と語ります。「私でさえ広い舞台で一人で踊ったらきっとすごく緊張してしまう環境で堂々と踊っているので、そこはすごく自信だったり、本当に楽しくやってるんだなって思います」と娘さんの成長に感動を覚えています。

視覚障がいを含む重複障がいのある息子さんの運動量を増やしたいとクラブに参加した葵さんは、地域新聞でクラブを見つけました。お子さんは高校1年生で、5年ほど通い続けています。「子どもたちが楽しくコミュニティに入っていける場であり、スポーツもできる場であり、社会を学ぶ場だと思います。親にとっても専門性があり、いろいろ教えていただける場です」とクラブの多面的な価値を強調します。

特別支援学級への進学で運動機会の減少を懸念しクラブに参加した佐藤さんは、娘さんが高校2年生でクラブに通い始めてから5年目となりました。「先生が障がいに理解があることが安心感につながりました。発表会での子どもの成長には毎回驚かされます」と語り、「インクルーシブな場所で、子どもが楽しく運動できる、そして安心していられる場所だと思います」と評価します。

クラブはチケット制を採用しており、無理なく参加でき、生徒の年齢制限もないため、長く通える環境が整っています。

新たな舞台「インクルーシブ大会」の開催へ

2024年1月、ルミンフィニRGは三鷹市で初の「インクルーシブ大会」を開催しました。障がいの有無、年齢、性別、国籍にかかわらず誰もが参加できる新体操の大会として大きな反響を呼びました。審査員にはプロのダンサーやオリンピアン、俳優など多彩な面々が並びます。

「全国からチームを呼ぶ大きな大会で驚きました。子どもは発表会に向けて張り切って練習し、人前で表現することが楽しくなってきたようです」と佐藤さん。林さんは「送られてくる動画を見ながら自宅で練習するなど、大会に意欲的です」と言い、葵さんは「視覚障がい者に対する審査基準もあり、本当にインクルーシブな大会だと感じました」と話します。

井上さんは、「〝できる・できない〟の評価ではなく、〝表現を楽しむ〟場にしたい」と語り、同じ規定演技を用いることで、誰もが同じフィールドで輝ける環境を創出しました。

「特別視せず、普通のこととして混ざっていく感覚を、子どもたちや観客の中に自然に生み出したかったんです」。井上さんは、この大会を年に一度の恒例行事を目指しており、2026年1月には第3回開催が予定されています。

スポーツが育む「生きる力」を社会へと広げていくために

井上さんの教え子は、保育士、OL、福祉職など、多様な道に進んでおり、中には指導者となる人も。元教え子たちが障がいのある子どもと初めて接する場面で、自然に対応している姿を見たときには、井上さんは「私がしてきたことは間違っていなかったんだなと嬉しくなりました」と感動を語っています。

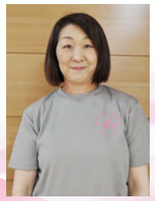
「障がいがある子も、そうでない子も、自分のペースで続けられる居場所があれば、未来の選択肢は広がります」と井上さん。大人になった後も充実した時間を過ごせるよう、生涯続けられるスポーツや趣味の重要性を説きます。今後は、社会人になっても通える「大人のためのクラス」も視野に入れ、「生涯スポーツ」としての新体操を広げたいと展望を語りました。

「表現すること、誰かと一緒に過ごすことに価値がある――そんな場所をこれからも守っていきたいと思っています」。

ルミンフィニRG

東京都三鷹市を拠点に活動する新体操クラブ。年齢や特性に関わらず誰もが共に新体操を楽しみ、成長できるインクルーシブな環境を提供している。
https://luminfini.wixsite.com/japanese

代表　井上寛子さん



元全日本代表の新体操選手で、指導歴も豊富。障がいのある息子さんの子育てを機に、誰もが表現できる場所を目指し、ルミンフィニRGを設立。インクルーシブな新体操の普及に尽力している。

6名様 PRESENT

F

Luminfini RGオリジナル
ミニトートバッグ

詳しくはP.31